

# The Imperative of Consciousness

Steven M. Greer, MD

1992

Copyright 2014 Sirius Disclosure

## 意識の規範

スティーブン・M・グリア 医師

1992年

著作権 2014 Sirius Disclosure

( [SiriusDisclosureのウェブサイトより](#) )

我々が ETI (地球外知性体) との相互作用について話すとき、結局のところ我々は、単に何かの自然現象や生物学的過程の観察結果ではなく、進化した意識的知性体との接触について語っているのである。それゆえに、注意深い考察が ETI の意図についての我々の考えのみならず、我々自身の意図と心構えについてもなされなければならない。新しく未知なものに対して排外的、暴力的、さらには偏執的にさえ反応する人間の性向 - ETS (地球外宇宙機) に対する軍と一般市民の両方の反応が十分にこれを証明している - は、取り上げられて修正されなければならない。理解できないもの、制御できないものは何でも、本来的に敵意あるもの、恐ろしいものと見なす人間の性質は、克服されなければならない。私的利益、不当利益のやみくもな追求、および ETS (地球外宇宙機) / ETI (地球外知性体) を主に '獲得' の枠組みで見ようとする傾向は、改められる必要がある。もし我々が ETI の '裏をかき'、彼らの技術およびエネルギー源を獲得しようという動機から行動するならば、我々の試みは失敗するだろう。もし我々が貪欲、恐怖、推測にもとづく敵意、疑念をもって ETI に接近するならば、そのとき我々の取り組みは、当然ながらことごとく無駄に終わるだろう。

我々が相手にしている存在者たちが、テレパシーによっても通常の方法によっても、我々の真の意図と動機を読み取り、我々の '努力の精神' を感知する能力を持っていることに、疑問の余地はない。成功するためには、我々の努力の精神が、科学的開放性、真理への探求心、他者の幸福を願う心、無私の心、悪意なき心、無欲の心を伴っている必要がある。ETI-人間関係を平和的に促進する願望が、何にもまして重要である。これらのことから、研究や調査を行なう人間側の '動機の純粋さ'こそが第一の必要条件であり、特定の技能、専門的知識、技術は、重要ではあるが二次的考察となる。我々の意識の幅広さと透明さが不可欠であり、それが重要性において他のすべての考察を超越する。技術と外面的な物事への我々のこだわりが、ETI-人間関係の全体像とそれがもたらす結果のすべてを曖昧なものにしがちである。能力と知識を軽視することはできないが、我々は意識の第一義的な重要性を断固として主張しなければならない。この点において、ただ 1 個のフラッシュライトを携えた高潔な意図を持つ初心者が、進んだ技術と要員と数十億ドルの資金を自由に使えるが、より劣った動機しか持たない政府機関よりも、大きな成功を収める (すでに

収めた?) ことがあり得る。確かに、かがり火を焚く一人の先住民がそれだけを用いて通信を確立し、真実の発見に近づくことがあるのである!

同じほどに重要な問題が、ETI (地球外知性体) の意図と動機を我々がどのように考えるか、ということである。もしタブロイド紙、扇情的な本、うわさの情報源を信じられるとすれば、ETI はすべて導師のような宇宙の神々か、そうでなければ宇宙の征服者ダース・ベイダーである! この論点のいずれかに分極する我々の性向は、早計であり、かつ根拠がない - また危険でもある。ETI が完全なる神々であったり、邪悪な帝国の職員であったりすることは、ありそうにないことである。それでも、ETI の動機についてのこれらの見方は、我々の心構えと行動に影響を及ぼしてきたし、意識的に対処しなければこれからも影響を及ぼし続けるだろう。今日までの事例を精査してみると、ETI たちの行動の一部は、人間側の感性のある部分にとり不可解であり、憂慮すべきであるとさえ言えるだろう。しかし、基本的に敵意を示す証拠はどこにもない。ここで我々は、行動について人間側の認識と実際の意図または動機とを区別しなければならない。これらは二つの別々の考察だからである。(この主題のより綿密な取り扱いについては、'The Case of Non-Hostility' [訳者註: 本論説が収録されている原著書の p.48-55] を読みたい) 一見憂慮すべきことに思える行動は、実際には中立的な、場合によっては好意的な目的のために起こされたのかもしれない。一人の救命救急医として、子供や外傷を負って機能障害になった成人の患者が、私の懸命の処置を苦痛に思うあまり、私が害意を抱いてそうしているのだと思っても不思議ではないし、そう思われぬ日など一日もない。私の動機がそれとは正反対であるにもかかわらずである。おびえた子供が、私の行動を危険で悪意あるものと認識するのは、子供のレベルにおける意識と知識の機能であり、私の真の意図を反映したものではまったくない。世間一般の通念では敵意があると見なされ、悪意の証拠とされた一部の ETI 事象において、類似した現象が起きている可能性はないのか?

CE-5 (第五種接近遭遇) 構想の研究においては、“ETI をまずは信用する” の原則に立ち、そうでないと証明されるまでは、彼らに敵意がないことを前提にするのが重要である。ETI に敵意があることを前提にすると、将来の互恵的コンタクトの雰囲気損ない、対立のない ETI-人間関係の発展を妨げることになる。これは、人間の歴史上ただ一度の機会であり、さらに進展させるためには、勇気、信頼、自制が必須の前提条件となる。ETI に敵意はないと前提することは、我々が盲目的に無邪気になることでも、ETI を完全無欠の神のような救済者であると思込むことでもない。まさにこれが、ET 存在者たちに対する開放的な、疑念を持たない、建設的な心構えを持つということなのである。そうでなければ、対立と敵意にもとづく現実がつくられることになる。それは、人類がすでに繰り返し歩んできた茨の道である。

実際の研究者や接近遭遇経験者たちの意識の向こう側には、人類全体の背景意識という重要な要素がある。ETI-人間の相互作用がこれからどのような種類と性質になっていくのか - したがってまた、CE-5 の取り組みがどのような具体的結果をもたらすのか - は、ある程度人間社会の進化水準に依存し、それによって制限もされるだろう。軍事主義、闘争、

暴力が大きな関心事である現状を考えると、ある ET 文明が人間との開放的コンタクトの程度を自ら制限しているとしても、驚くべきではない。人間社会が世界平和と協調のために必要な移行を成し遂げるにつれて、ETI の開放性と互恵的な意思交換が同時に増大するのを、我々は見ることになるだろう。この意味で、CE-5 構想の成功は人類の平和と統一に直接依存している。またそれゆえに、世界平和、世界統一、協調が、将来の ETI-人間事象の重要な決定要因となるのである。CE-5 構想の深さと質はささやかなものかもしれない。しかしその深さと質は、人間社会が平和と統一に向かって進化するにつれて、より深く、より高くなっていくだろう。

スティーブン・M・グリア著：

“Extraterrestrial Contact: The Evidence and Implications” (異星人コンタクト：証拠と意味)

p. 178 - 180 より

(訳： 廣瀬 保雄)